

四度加行の基礎資料 — 『四度土代』 —

中山照玲

筆者が、この『四度土代』について教示いただいたのは、夙に事相の達匠として高名であった布施淨戒大僧正からで、『四度次第』の伝授の時に、伝授に先立って行われた「智山の法流と加行について」の講義があつて、その中の加行の日数に関連して、本書の著者の隆源僧正と共に教えていただいた。

本書は、元來醍醐寺三寶院本山での四度の修行者のために、報恩院第十世隆源大僧正（一三四一〜一四二五）があつて、実修の基本について記したもので、当時四度修行の基礎が定まらず混乱していた根來寺の中性院聖融僧都からの希望があつて、隆源大僧正によつて、書き整えて伝えられ、それがもとになつて流布するに到つたといわれ、その事情については、本書の末尾に小字で記されている。

そこには、「已上四度加行大概土台は、報恩院さうおんいんの前の大僧正御房の御草なり。この度根來寺中性院の聖融僧都、彼の御記を所望申し畢おひんぬ。その子細は、近ごろ田舎辺の四度加行等の作法粗々本寺の儀に違する處これ有らんか。仍て不審を散ぜしめんが為に、此の如く申せ令むるか。此の間、彼の寺の辺において行じ來たる作法一帖、聖融僧都これを書進す。取り合わせ御一見有る處、誠に当流の作法に相違多端これ有り、仍つて御記の分一卷御清書有りて、これを遣わさる。その次でに御本を申し請け、これを書写しおわる。」と記されている。

隆源大僧正は、南北朝末期頃のかたで、この頃の醍醐寺本山の四度修行の實際が知られる重要な著作といえよう。

凡例

底本 成田山仏教図書館所蔵本 ち四64

外題に『四度土代』と墨書され、所蔵者であつた宥豊（宥豊を用いる）師の長方形の朱印（縦三・七センチ、横二・二センチ）がある。内題には「當流四度加行條々 ワタケン ム」とあるが、尾題は無い。

粘葉装柀型 全一三紙 縦一六・三センチ、横一六・六センチ。

寛政元年（一七八九）宥傳（寛政二年に宥豊と改名）師の書写本。

この写本は他の写本よりも、我々が現在用いている常用字体が多く用いられていることから、これを底本とすることにした。

㊦甲本 成田山仏教研究所所蔵本

外題に『四度土代』と墨書され、所蔵者であつた弄賢師の名前が朱書きされている。内題には「當流四度加行條々云」とあり、尾題は無い。

粘葉装柀型 全一二紙 縦一六・五センチ、横一六・四センチ。

豊山の和大長谷寺所蔵本からの、元禄十年（一六九七）の転写本。虫損多し。

㊧乙本 成田山仏教図書館所蔵本 ち四63

外題に『四度土代』と墨書され、内題には「當流四度加行」とあり、尾題は無い。

粘葉装柀型 全一三紙 縦一六・四センチ、横一六・五センチ。

京都智積院で正徳二年（一七一二）に圓胤師が書写した写本。

⑥丙本 成田山仏教研究所蔵本

外題に『四度土代』と墨書され、所蔵者であった玄深師の朱の角印（二・二三センチ四方）二種（陽刻の海龍之印と陰刻の玄深）が押印されている。

包紙にも「四度土代」と墨書され、玄深の署名と海龍之印の朱印が押印されている。

粘葉装柘型 全一三紙 縦一六・二三センチ、横一六・六センチ。

奥書が無いために書写年代が不明であるが、一緒に納められている玄深師書写の他の聖教次第類の奥書から見て、文化九年（一八一二）に智積院で行なわれた元瑜僧正の伝授に際して書写されたと見られる。

右の四写本の他に、三宝院流憲深方（三憲と略称される）の一流伝授の時に受者たちに配布された、複製聖教次第の中におさめられていた一本があるが、これは前記四本中の乙本に近いようである。

また東密事相口訣修成1（青山社刊）の中に、稲谷祐宣師が、智積院第七世能化の泊如運敵僧正の『四度泊如記』と共に、この『四度土代』を訓下して出版されている。

この二本については、必要に応じて参照註記させていただくことにする。

⑦とあるのは、底本に朱筆で書き込まれている、異本による校異である。

⑧四種の写本間にある校異は、下段に脚注形式で示す。

句点、読点は無いので適宜字間を空け、改行し合点は加えない。

校合本の明らかに写誤と思われる文字については、取りあげないものがある。

四度土代項目

一十八道加行正行日数事 三九

一加行等、日次可撰之事 四〇

一日次治定之已後作法受得事 四一

一本尊并道場料理用心事 四一

一礼拝等所作事 四七

一次第書写并暗誦等時分事 四七

一初行間事 四九

金剛界 五〇

次第書写并暗誦事 五二

胎藏界 五四

護摩 五四

この四度土代項目は、本文中に示されている項目を私に並べたもので、全体的内容を知るうえで便利と考えて最初に掲げる。

(外題) 四度土代

①宗云 四度土代憲深第七代幸心完隆源作也

(内題) 當流四度加行條々

③ワタクシム

當一條ム私

惣一総

ノ一シテ

願一願

答一答

焚一然

勤一勤一勒一勤

坎一歟

台一胎

一十八道加行正行日数事

加行者必百日正行者惣而百七日也 但先七日開白

結頭畢次百日更修之仍七日号 初行共是正行也而已

問 七日初行百日正行是何事哉

答 共是正行也 凡加行百一日日中結頭自其夜正

行百日可修之焚而百日日数延々 若其間或重服或発

病事出来設雖及八九十日必可破之又以後日始行之

時更自加行百日可修之是故先七日正行開白結頭

設百日中雖破之勤行之時唯正行 自加行不修

之仍願行者苦勞如此被定置之坎此日数十八道不限金

台護摩可准知之者也

①「宗云四度土代ハ憲深第七代幸心完隆源ノ作也」ハ表紙見返シノ押紙ニアル

書キ込ミ。「幸心完」ハ「報恩院」ノ片字。

②「一條々」①右ノ下小サク「一條」云「トアリ、

③「ム」私ノ片字、④無シ。稲谷祐宣

師本デハ、コノ下ニ「隆源これを撰す」トアル。

④「事」無シ。

⑤「先」無シ。

⑥「仍テ七日」①④「仍テ初之七日」トアル。

⑦「初行」①「初坎」。

⑧「也」①④無シ。

⑨「凡」①無シ。

⑩「又」①無シ。

⑪「勤行」④「又勤行」トアル。①「勒修」。

⑫「加行」④「正行」

⑬「願」④「願」

⑭「可」④無シ。

問 重受人加行日数等如何

答 重受人依人依事而兼難定或貴人或老病人持戒

持律之僧其機隨師主授之仍加行七日三七日又無加行

等不定者欵但其流師祖之先蹤又者傍例等可尋之欵重

授人多分加行不及正行沙汰欵但於四度法販初

心沙汰之者何無正行乎

15 「重受」人依「人依事」①「重受之依人事」②「重受人依人事」

16 「兼」②無シ。

17 「難定」①「難定之」。

18 「持戒」①「或時戒」。

19 「三七日」①「三日」。

20 「重授」①②「重受」。

21 「者何」①「者如何」。

販一歸

欵一歟

一 加行等日次可撰之事

凡修中無為所願成就為尤可撰吉日就中師資衰日

可除之又赤舌日當時多分不用之但是非陰陽道存知

云云其外宿曜支于等各有吉凶為師主可撰定云

問 宿曜欵支于專以何可為先乎

答 天竺三者以宿曜為本漢朝者以支于為先我朝者兩

国之風受宿曜支于共用之由口傳也但灌頂等自宗之習

猶以宿曜為本欵宜任師主之所為而已

願一願

願一願

陰一陰

兩一兩

22 「赤舌日」①「亦舌日」。(シヤクゼツニチハ凶日)

23 「陰陽道存知」①「陰陽道之在知」。

24 「撰定」①「撰之」。

25 「欵」①無シ。

26 「但」②無シ。

27 「曜」②無シ。

聊、聊、兩、兩

一日次治定之已後作法受得事
師主折紙等註之被授之或草子受者強不及害
写云但本尊所作聊有異本兩様共当流之師○所被用
也所詮當時被書様之本可為肝要不可異求之

28 「註」㊦「注」。
29 「害」㊦「西」ニハ「書」トアリ写誤カ。
30 「聊」㊦「都」。
31 「師祖」㊦「師」。
32 「様」㊦「授」。

一本尊并道場料理用心事

壇、壇

本尊如意輪中央左右脇大師尊師御影懸之其前小壇

埵、埵

或机一机立之其上闕伽器一前供花火舎一薰香花瓶二埵

裏、裏

密枝壇左右燈臺二本供二灯明一壇前半帖一枚敷之左脇

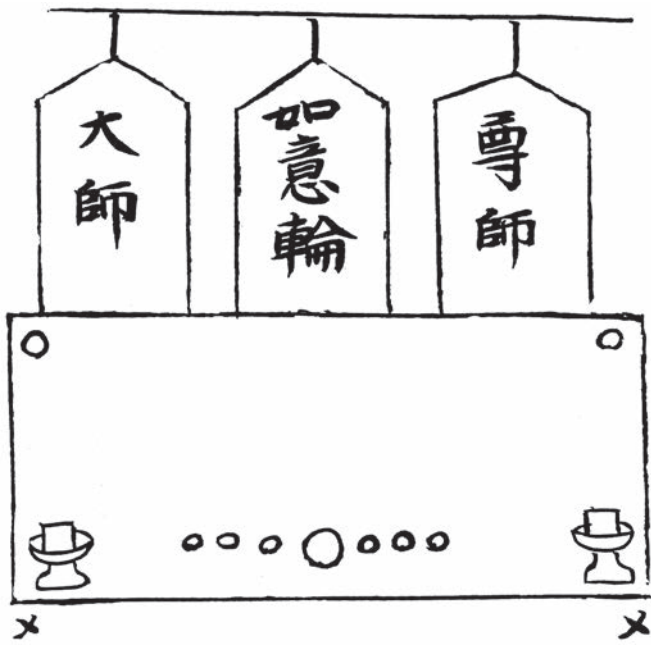
邊、邊

机上理趣經札懺文置之或ハ焼香一裏右邊打鳴一口

罍、罍

座有ニ種木一置之以罍可示之

33 「机」㊦「脚」。
34 「壇」㊦無シ。
35 「裏」㊦「裏」。
36 「座有ニ種木」ト小字デアリ、㊦ニハ「在座鐘木」トアル。



燈—灯

兩—兩

盂—盂

佛—佛

衆—衆

焚—然

壇—壇

坎—歟

此外用意具

池桶 闕伽桶³⁷ 有³⁸紗 花籠 香箱 火打 硫黃 燈心 等

問 常³⁸以大師懸³⁹本尊⁴⁰左⁴¹尊師者右也今何相翻乎

答 自元兩樣也共師祖所被⁴²用也但本儀⁴³如今⁴⁴盂其故

佛界以右為本衆生界以左為上仍大師本尊右方奉懸之

也⁴⁵焚⁴⁶而順⁴⁷世間儀⁴⁸而以左方為上首以大師左方⁴⁹掛之

又御影之向樣⁵⁰准⁵¹本尊⁵²仍此樣無及⁵³子細⁵⁴且阿弥陀⁵⁵三尊

時或左觀音右勢至或左勢至右觀音是兩經之異說也左

右共非無其例而已

問 壇上鈴杵金剛盤脇机⁵⁶灑水塗香器居⁵⁷之雖非當時⁵⁸

之所用為莊嚴置之樣有之坎如何

答 誠可然事坎但當流未用之仍所不置之也

問 三時供物如何

答 先⁵⁹開白⁶⁰香花燈明之外熟仏供⁶¹三杯備之開白⁶²雖

為⁶³初夜⁶⁴備仏供事御修法護摩已下通法則耳

37 「有」②「在」。「池桶」ハ「ミズオケ」

38 「常」①「當」。

39 「懸」①無シ。

40 「本尊左」②「本尊左也」。

41 「尊師者右也」②無シ、③「者」無シ。

42 「今」①「令」。

43 「掛」①②③「懸」。

44 「樣」①②「樣」トアルハ写誤カ。

45 「器」②無シ。

46 「當」①無シ。

47 「開白」②無シ。

48 「為」②無。

49 「初夜」①「夜」。

50 「初夜」①「夜」。

51 「初夜」①「夜」。

52 「初夜」①「夜」。

53 「初夜」①「夜」。

54 「初夜」①「夜」。

55 「初夜」①「夜」。

56 「初夜」①「夜」。

57 「初夜」①「夜」。

58 「初夜」①「夜」。

59 「初夜」①「夜」。

60 「初夜」①「夜」。

61 「初夜」①「夜」。

62 「初夜」①「夜」。

荳、蕤、經、經
羅、羅、晝、晝

問一切修法別行等何故以初夜時一起首乎
答荳、蕤、經、經上云一切曼荼羅勿於晝日起首而作

應一應
驗一驗

會一會

若晝日作獲大苦惱於日沒時應作口應知於夜分時諸事寂靜作法有驗是故口於夜應作三摩耶等大曼荼羅又於日沒之時准此應知於夜分諸事寂靜作法有驗是日沒之時諸天集會觀視作法之處加威彼人是故於夜作曼荼羅文

問熟佛供之時汁菓子備之乎如何

答當流之習供壇雖備仏供於汁菓子者未供之自護摩汁菓子備之供壇熟仏供二杯不遇也後夜時香花燈明自是外飲食粥等無之當流之習粥自護摩供之供壇一向畧之仍初夜後夜二時無供物也日中時開白之外每日日中佛供備之但開白熟佛供二杯自翌日中者洗米二杯用之大師尊師同之初夜時香花之

50 「以」之無シ。

51 「曼荼羅」①②「大曼荼羅」。

52 「有」之「者」。

53 「大曼荼羅」①「大万荼羅」。

54 「曼荼羅」①「万荼羅」。

55 「者」①②無シ。

56 「護摩」①「言」片字

57 「一紅花」①「紅世」

58 「飲」①「飯」

59 「護摩」①「言」

60 「初夜後夜」①「初後夜」

61 「米白」①「白米」②「米白世」③「白米」④「米白リ」

外佛供無之如後夜⑧² 已上供物變式加行初行正 行無^レ異金胎等准^レ之^{⑧⁴}

一 礼拝等所作事⑥⁵ ⑥⁶ ⑥⁷

先開白初夜香花燈明飲食辨備⑥⁸ ⑥⁹ スルコト 如前⑥¹⁰ 或^レ承在^{⑥¹¹}

疊一疊、躰一躰

次行者威儀正⑥¹² フクシテ 仏前半疊前進寄礼拝始之五躰投⑥¹³ ⑥¹⁴ ⑥¹⁵ ⑥¹⁶ ⑥¹⁷

埴一埴

地也⑥¹⁸ ナリ 左頭中指之間念珠埴数可取也⑥¹⁹ ⑥²⁰ マテズ 一遍每頌文⑥²¹ ⑥²²

拜一拜

一遍謂礼拜百遍誦文百遍也⑥²³ ⑥²⁴ 礼拜了着半疊金二⑥²⁵ ⑥²⁶ テ

打⑥²⁷ 此金或ハ礼拜 已前ニ打之^{⑥²⁸}

次心經七卷或理趣經等作法了磨念珠能之祈念⑥²⁹ ⑥³⁰ テ^{⑥³¹} ⑥³² ⑥³³ ⑥³⁴ ⑥³⁵ ⑥³⁶ ⑥³⁷ ⑥³⁸ ⑥³⁹ ⑥⁴⁰ ⑥⁴¹ ⑥⁴² ⑥⁴³ ⑥⁴⁴ ⑥⁴⁵ ⑥⁴⁶ ⑥⁴⁷ ⑥⁴⁸ ⑥⁴⁹ ⑥⁵⁰ ⑥⁵¹ ⑥⁵² ⑥⁵³ ⑥⁵⁴ ⑥⁵⁵ ⑥⁵⁶ ⑥⁵⁷ ⑥⁵⁸ ⑥⁵⁹ ⑥⁶⁰ ⑥⁶¹ ⑥⁶² ⑥⁶³ ⑥⁶⁴ ⑥⁶⁵ ⑥⁶⁶ ⑥⁶⁷ ⑥⁶⁸ ⑥⁶⁹ ⑥⁷⁰ ⑥⁷¹ ⑥⁷² ⑥⁷³ ⑥⁷⁴ ⑥⁷⁵ ⑥⁷⁶ ⑥⁷⁷ ⑥⁷⁸ ⑥⁷⁹ ⑥⁸⁰ ⑥⁸¹ ⑥⁸² ⑥⁸³ ⑥⁸⁴ ⑥⁸⁵ ⑥⁸⁶ ⑥⁸⁷ ⑥⁸⁸ ⑥⁸⁹ ⑥⁹⁰ ⑥⁹¹ ⑥⁹² ⑥⁹³ ⑥⁹⁴ ⑥⁹⁵ ⑥⁹⁶ ⑥⁹⁷ ⑥⁹⁸ ⑥⁹⁹ ⑥¹⁰⁰ ⑥¹⁰¹ ⑥¹⁰² ⑥¹⁰³ ⑥¹⁰⁴ ⑥¹⁰⁵ ⑥¹⁰⁶ ⑥¹⁰⁷ ⑥¹⁰⁸ ⑥¹⁰⁹ ⑥¹¹⁰ ⑥¹¹¹ ⑥¹¹² ⑥¹¹³ ⑥¹¹⁴ ⑥¹¹⁵ ⑥¹¹⁶ ⑥¹¹⁷ ⑥¹¹⁸ ⑥¹¹⁹ ⑥¹²⁰ ⑥¹²¹ ⑥¹²² ⑥¹²³ ⑥¹²⁴ ⑥¹²⁵ ⑥¹²⁶ ⑥¹²⁷ ⑥¹²⁸ ⑥¹²⁹ ⑥¹³⁰ ⑥¹³¹ ⑥¹³² ⑥¹³³ ⑥¹³⁴ ⑥¹³⁵ ⑥¹³⁶ ⑥¹³⁷ ⑥¹³⁸ ⑥¹³⁹ ⑥¹⁴⁰ ⑥¹⁴¹ ⑥¹⁴² ⑥¹⁴³ ⑥¹⁴⁴ ⑥¹⁴⁵ ⑥¹⁴⁶ ⑥¹⁴⁷ ⑥¹⁴⁸ ⑥¹⁴⁹ ⑥¹⁵⁰ ⑥¹⁵¹ ⑥¹⁵² ⑥¹⁵³ ⑥¹⁵⁴ ⑥¹⁵⁵ ⑥¹⁵⁶ ⑥¹⁵⁷ ⑥¹⁵⁸ ⑥¹⁵⁹ ⑥¹⁶⁰ ⑥¹⁶¹ ⑥¹⁶² ⑥¹⁶³ ⑥¹⁶⁴ ⑥¹⁶⁵ ⑥¹⁶⁶ ⑥¹⁶⁷ ⑥¹⁶⁸ ⑥¹⁶⁹ ⑥¹⁷⁰ ⑥¹⁷¹ ⑥¹⁷² ⑥¹⁷³ ⑥¹⁷⁴ ⑥¹⁷⁵ ⑥¹⁷⁶ ⑥¹⁷⁷ ⑥¹⁷⁸ ⑥¹⁷⁹ ⑥¹⁸⁰ ⑥¹⁸¹ ⑥¹⁸² ⑥¹⁸³ ⑥¹⁸⁴ ⑥¹⁸⁵ ⑥¹⁸⁶ ⑥¹⁸⁷ ⑥¹⁸⁸ ⑥¹⁸⁹ ⑥¹⁹⁰ ⑥¹⁹¹ ⑥¹⁹² ⑥¹⁹³ ⑥¹⁹⁴ ⑥¹⁹⁵ ⑥¹⁹⁶ ⑥¹⁹⁷ ⑥¹⁹⁸ ⑥¹⁹⁹ ⑥²⁰⁰ ⑥²⁰¹ ⑥²⁰² ⑥²⁰³ ⑥²⁰⁴ ⑥²⁰⁵ ⑥²⁰⁶ ⑥²⁰⁷ ⑥²⁰⁸ ⑥²⁰⁹ ⑥²¹⁰ ⑥²¹¹ ⑥²¹² ⑥²¹³ ⑥²¹⁴ ⑥²¹⁵ ⑥²¹⁶ ⑥²¹⁷ ⑥²¹⁸ ⑥²¹⁹ ⑥²²⁰ ⑥²²¹ ⑥²²² ⑥²²³ ⑥²²⁴ ⑥²²⁵ ⑥²²⁶ ⑥²²⁷ ⑥²²⁸ ⑥²²⁹ ⑥²³⁰ ⑥²³¹ ⑥²³² ⑥²³³ ⑥²³⁴ ⑥²³⁵ ⑥²³⁶ ⑥²³⁷ ⑥²³⁸ ⑥²³⁹ ⑥²⁴⁰ ⑥²⁴¹ ⑥²⁴² ⑥²⁴³ ⑥²⁴⁴ ⑥²⁴⁵ ⑥²⁴⁶ ⑥²⁴⁷ ⑥²⁴⁸ ⑥²⁴⁹ ⑥²⁵⁰ ⑥²⁵¹ ⑥²⁵² ⑥²⁵³ ⑥²⁵⁴ ⑥²⁵⁵ ⑥²⁵⁶ ⑥²⁵⁷ ⑥²⁵⁸ ⑥²⁵⁹ ⑥²⁶⁰ ⑥²⁶¹ ⑥²⁶² ⑥²⁶³ ⑥²⁶⁴ ⑥²⁶⁵ ⑥²⁶⁶ ⑥²⁶⁷ ⑥²⁶⁸ ⑥²⁶⁹ ⑥²⁷⁰ ⑥²⁷¹ ⑥²⁷² ⑥²⁷³ ⑥²⁷⁴ ⑥²⁷⁵ ⑥²⁷⁶ ⑥²⁷⁷ ⑥²⁷⁸ ⑥²⁷⁹ ⑥²⁸⁰ ⑥²⁸¹ ⑥²⁸² ⑥²⁸³ ⑥²⁸⁴ ⑥²⁸⁵ ⑥²⁸⁶ ⑥²⁸⁷ ⑥²⁸⁸ ⑥²⁸⁹ ⑥²⁹⁰ ⑥²⁹¹ ⑥²⁹² ⑥²⁹³ ⑥²⁹⁴ ⑥²⁹⁵ ⑥²⁹⁶ ⑥²⁹⁷ ⑥²⁹⁸ ⑥²⁹⁹ ⑥³⁰⁰ ⑥³⁰¹ ⑥³⁰² ⑥³⁰³ ⑥³⁰⁴ ⑥³⁰⁵ ⑥³⁰⁶ ⑥³⁰⁷ ⑥³⁰⁸ ⑥³⁰⁹ ⑥³¹⁰ ⑥³¹¹ ⑥³¹² ⑥³¹³ ⑥³¹⁴ ⑥³¹⁵ ⑥³¹⁶ ⑥³¹⁷ ⑥³¹⁸ ⑥³¹⁹ ⑥³²⁰ ⑥³²¹ ⑥³²² ⑥³²³ ⑥³²⁴ ⑥³²⁵ ⑥³²⁶ ⑥³²⁷ ⑥³²⁸ ⑥³²⁹ ⑥³³⁰ ⑥³³¹ ⑥³³² ⑥³³³ ⑥³³⁴ ⑥³³⁵ ⑥³³⁶ ⑥³³⁷ ⑥³³⁸ ⑥³³⁹ ⑥³⁴⁰ ⑥³⁴¹ ⑥³⁴² ⑥³⁴³ ⑥³⁴⁴ ⑥³⁴⁵ ⑥³⁴⁶ ⑥³⁴⁷ ⑥³⁴⁸ ⑥³⁴⁹ ⑥³⁵⁰ ⑥³⁵¹ ⑥³⁵² ⑥³⁵³ ⑥³⁵⁴ ⑥³⁵⁵ ⑥³⁵⁶ ⑥³⁵⁷ ⑥³⁵⁸ ⑥³⁵⁹ ⑥³⁶⁰ ⑥³⁶¹ ⑥³⁶² ⑥³⁶³ ⑥³⁶⁴ ⑥³⁶⁵ ⑥³⁶⁶ ⑥³⁶⁷ ⑥³⁶⁸ ⑥³⁶⁹ ⑥³⁷⁰ ⑥³⁷¹ ⑥³⁷² ⑥³⁷³ ⑥³⁷⁴ ⑥³⁷⁵ ⑥³⁷⁶ ⑥³⁷⁷ ⑥³⁷⁸ ⑥³⁷⁹ ⑥³⁸⁰ ⑥³⁸¹ ⑥³⁸² ⑥³⁸³ ⑥³⁸⁴ ⑥³⁸⁵ ⑥³⁸⁶ ⑥³⁸⁷ ⑥³⁸⁸ ⑥³⁸⁹ ⑥³⁹⁰ ⑥³⁹¹ ⑥³⁹² ⑥³⁹³ ⑥³⁹⁴ ⑥³⁹⁵ ⑥³⁹⁶ ⑥³⁹⁷ ⑥³⁹⁸ ⑥³⁹⁹ ⑥⁴⁰⁰ ⑥⁴⁰¹ ⑥⁴⁰² ⑥⁴⁰³ ⑥⁴⁰⁴ ⑥⁴⁰⁵ ⑥⁴⁰⁶ ⑥⁴⁰⁷ ⑥⁴⁰⁸ ⑥⁴⁰⁹ ⑥⁴¹⁰ ⑥⁴¹¹ ⑥⁴¹² ⑥⁴¹³ ⑥⁴¹⁴ ⑥⁴¹⁵ ⑥⁴¹⁶ ⑥⁴¹⁷ ⑥⁴¹⁸ ⑥⁴¹⁹ ⑥⁴²⁰ ⑥⁴²¹ ⑥⁴²² ⑥⁴²³ ⑥⁴²⁴ ⑥⁴²⁵ ⑥⁴²⁶ ⑥⁴²⁷ ⑥⁴²⁸ ⑥⁴²⁹ ⑥⁴³⁰ ⑥⁴³¹ ⑥⁴³² ⑥⁴³³ ⑥⁴³⁴ ⑥⁴³⁵ ⑥⁴³⁶ ⑥⁴³⁷ ⑥⁴³⁸ ⑥⁴³⁹ ⑥⁴⁴⁰ ⑥⁴⁴¹ ⑥⁴⁴² ⑥⁴⁴³ ⑥⁴⁴⁴ ⑥⁴⁴⁵ ⑥⁴⁴⁶ ⑥⁴⁴⁷ ⑥⁴⁴⁸ ⑥⁴⁴⁹ ⑥⁴⁵⁰ ⑥⁴⁵¹ ⑥⁴⁵² ⑥⁴⁵³ ⑥⁴⁵⁴ ⑥⁴⁵⁵ ⑥⁴⁵⁶ ⑥⁴⁵⁷ ⑥⁴⁵⁸ ⑥⁴⁵⁹ ⑥⁴⁶⁰ ⑥⁴⁶¹ ⑥⁴⁶² ⑥⁴⁶³ ⑥⁴⁶⁴ ⑥⁴⁶⁵ ⑥⁴⁶⁶ ⑥⁴⁶⁷ ⑥⁴⁶⁸ ⑥⁴⁶⁹ ⑥⁴⁷⁰ ⑥⁴⁷¹ ⑥⁴⁷² ⑥⁴⁷³ ⑥⁴⁷⁴ ⑥⁴⁷⁵ ⑥⁴⁷⁶ ⑥⁴⁷⁷ ⑥⁴⁷⁸ ⑥⁴⁷⁹ ⑥⁴⁸⁰ ⑥⁴⁸¹ ⑥⁴⁸² ⑥⁴⁸³ ⑥⁴⁸⁴ ⑥⁴⁸⁵ ⑥⁴⁸⁶ ⑥⁴⁸⁷ ⑥⁴⁸⁸ ⑥⁴⁸⁹ ⑥⁴⁹⁰ ⑥⁴⁹¹ ⑥⁴⁹² ⑥⁴⁹³ ⑥⁴⁹⁴ ⑥⁴⁹⁵ ⑥⁴⁹⁶ ⑥⁴⁹⁷ ⑥⁴⁹⁸ ⑥⁴⁹⁹ ⑥⁵⁰⁰ ⑥⁵⁰¹ ⑥⁵⁰² ⑥⁵⁰³ ⑥⁵⁰⁴ ⑥⁵⁰⁵ ⑥⁵⁰⁶ ⑥⁵⁰⁷ ⑥⁵⁰⁸ ⑥⁵⁰⁹ ⑥⁵¹⁰ ⑥⁵¹¹ ⑥⁵¹² ⑥⁵¹³ ⑥⁵¹⁴ ⑥⁵¹⁵ ⑥⁵¹⁶ ⑥⁵¹⁷ ⑥⁵¹⁸ ⑥⁵¹⁹ ⑥⁵²⁰ ⑥⁵²¹ ⑥⁵²² ⑥⁵²³ ⑥⁵²⁴ ⑥⁵²⁵ ⑥⁵²⁶ ⑥⁵²⁷ ⑥⁵²⁸ ⑥⁵²⁹ ⑥⁵³⁰ ⑥⁵³¹ ⑥⁵³² ⑥⁵³³ ⑥⁵³⁴ ⑥⁵³⁵ ⑥⁵³⁶ ⑥⁵³⁷ ⑥⁵³⁸ ⑥⁵³⁹ ⑥⁵⁴⁰ ⑥⁵⁴¹ ⑥⁵⁴² ⑥⁵⁴³ ⑥⁵⁴⁴ ⑥⁵⁴⁵ ⑥⁵⁴⁶ ⑥⁵⁴⁷ ⑥⁵⁴⁸ ⑥⁵⁴⁹ ⑥⁵⁵⁰ ⑥⁵⁵¹ ⑥⁵⁵² ⑥⁵⁵³ ⑥⁵⁵⁴ ⑥⁵⁵⁵ ⑥⁵⁵⁶ ⑥⁵⁵⁷ ⑥⁵⁵⁸ ⑥⁵⁵⁹ ⑥⁵⁶⁰ ⑥⁵⁶¹ ⑥⁵⁶² ⑥⁵⁶³ ⑥⁵⁶⁴ ⑥⁵⁶⁵ ⑥⁵⁶⁶ ⑥⁵⁶⁷ ⑥⁵⁶⁸ ⑥⁵⁶⁹ ⑥⁵⁷⁰ ⑥⁵⁷¹ ⑥⁵⁷² ⑥⁵⁷³ ⑥⁵⁷⁴ ⑥⁵⁷⁵ ⑥⁵⁷⁶ ⑥⁵⁷⁷ ⑥⁵⁷⁸ ⑥⁵⁷⁹ ⑥⁵⁸⁰ ⑥⁵⁸¹ ⑥⁵⁸² ⑥⁵⁸³ ⑥⁵⁸⁴ ⑥⁵⁸⁵ ⑥⁵⁸⁶ ⑥⁵⁸⁷ ⑥⁵⁸⁸ ⑥⁵⁸⁹ ⑥⁵⁹⁰ ⑥⁵⁹¹ ⑥⁵⁹² ⑥⁵⁹³ ⑥⁵⁹⁴ ⑥⁵⁹⁵ ⑥⁵⁹⁶ ⑥⁵⁹⁷ ⑥⁵⁹⁸ ⑥⁵⁹⁹ ⑥⁶⁰⁰ ⑥⁶⁰¹ ⑥⁶⁰² ⑥⁶⁰³ ⑥⁶⁰⁴ ⑥⁶⁰⁵ ⑥⁶⁰⁶ ⑥⁶⁰⁷ ⑥⁶⁰⁸ ⑥⁶⁰⁹ ⑥⁶¹⁰ ⑥⁶¹¹ ⑥⁶¹² ⑥⁶¹³ ⑥⁶¹⁴ ⑥⁶¹⁵ ⑥⁶¹⁶ ⑥⁶¹⁷ ⑥⁶¹⁸ ⑥⁶¹⁹ ⑥⁶²⁰ ⑥⁶²¹ ⑥⁶²² ⑥⁶²³ ⑥⁶²⁴ ⑥⁶²⁵ ⑥⁶²⁶ ⑥⁶²⁷ ⑥⁶²⁸ ⑥⁶²⁹ ⑥⁶³⁰ ⑥⁶³¹ ⑥⁶³² ⑥⁶³³ ⑥⁶³⁴ ⑥⁶³⁵ ⑥⁶³⁶ ⑥⁶³⁷ ⑥⁶³⁸ ⑥⁶³⁹ ⑥⁶⁴⁰ ⑥⁶⁴¹ ⑥⁶⁴² ⑥⁶⁴³ ⑥⁶⁴⁴ ⑥⁶⁴⁵ ⑥⁶⁴⁶ ⑥⁶⁴⁷ ⑥⁶⁴⁸ ⑥⁶⁴⁹ ⑥⁶⁵⁰ ⑥⁶⁵¹ ⑥⁶⁵² ⑥⁶⁵³ ⑥⁶⁵⁴ ⑥⁶⁵⁵ ⑥⁶⁵⁶ ⑥⁶⁵⁷ ⑥⁶⁵⁸ ⑥⁶⁵⁹ ⑥⁶⁶⁰ ⑥⁶⁶¹ ⑥⁶⁶² ⑥⁶⁶³ ⑥⁶⁶⁴ ⑥⁶⁶⁵ ⑥⁶⁶⁶ ⑥⁶⁶⁷ ⑥⁶⁶⁸ ⑥⁶⁶⁹ ⑥⁶⁷⁰ ⑥⁶⁷¹ ⑥⁶⁷² ⑥⁶⁷³ ⑥⁶⁷⁴ ⑥⁶⁷⁵ ⑥⁶⁷⁶ ⑥⁶⁷⁷ ⑥⁶⁷⁸ ⑥⁶⁷⁹ ⑥⁶⁸⁰ ⑥⁶⁸¹ ⑥⁶⁸² ⑥⁶⁸³ ⑥⁶⁸⁴ ⑥⁶⁸⁵ ⑥⁶⁸⁶ ⑥⁶⁸⁷ ⑥⁶⁸⁸ ⑥⁶⁸⁹ ⑥⁶⁹⁰ ⑥⁶⁹¹ ⑥⁶⁹² ⑥⁶⁹³ ⑥⁶⁹⁴ ⑥⁶⁹⁵ ⑥⁶⁹⁶ ⑥⁶⁹⁷ ⑥⁶⁹⁸ ⑥⁶⁹⁹ ⑥⁷⁰⁰ ⑥⁷⁰¹ ⑥⁷⁰² ⑥⁷⁰³ ⑥⁷⁰⁴ ⑥⁷⁰⁵ ⑥⁷⁰⁶ ⑥⁷⁰⁷ ⑥⁷⁰⁸ ⑥⁷⁰⁹ ⑥⁷¹⁰ ⑥⁷¹¹ ⑥⁷¹² ⑥⁷¹³ ⑥⁷¹⁴ ⑥⁷¹⁵ ⑥⁷¹⁶ ⑥⁷¹⁷ ⑥⁷¹⁸ ⑥⁷¹⁹ ⑥⁷²⁰ ⑥⁷²¹ ⑥⁷²² ⑥⁷²³ ⑥⁷²⁴ ⑥⁷²⁵ ⑥⁷²⁶ ⑥⁷²⁷ ⑥⁷²⁸ ⑥⁷²⁹ ⑥⁷³⁰ ⑥⁷³¹ ⑥⁷³² ⑥⁷³³ ⑥⁷³⁴ ⑥⁷³⁵ ⑥⁷³⁶ ⑥⁷³⁷ ⑥⁷³⁸ ⑥⁷³⁹ ⑥⁷⁴⁰ ⑥⁷⁴¹ ⑥⁷⁴² ⑥⁷⁴³ ⑥⁷⁴⁴ ⑥⁷⁴⁵ ⑥⁷⁴⁶ ⑥⁷⁴⁷ ⑥⁷⁴⁸ ⑥⁷⁴⁹ ⑥⁷⁵⁰ ⑥⁷⁵¹ ⑥⁷⁵² ⑥⁷⁵³ ⑥⁷⁵⁴ ⑥⁷⁵⁵ ⑥⁷⁵⁶ ⑥⁷⁵⁷ ⑥⁷⁵⁸ ⑥⁷⁵⁹ ⑥⁷⁶⁰ ⑥⁷⁶¹ ⑥⁷⁶² ⑥⁷⁶³ ⑥⁷⁶⁴ ⑥⁷⁶⁵ ⑥⁷⁶⁶ ⑥⁷⁶⁷ ⑥⁷⁶⁸ ⑥⁷⁶⁹ ⑥⁷⁷⁰ ⑥⁷⁷¹ ⑥⁷⁷² ⑥⁷⁷³ ⑥⁷⁷⁴ ⑥⁷⁷⁵ ⑥⁷⁷⁶ ⑥⁷⁷⁷ ⑥⁷⁷⁸ ⑥⁷⁷⁹ ⑥⁷⁸⁰ ⑥⁷⁸¹ ⑥⁷⁸² ⑥⁷⁸³ ⑥⁷⁸⁴ ⑥⁷⁸⁵ ⑥⁷⁸⁶ ⑥⁷⁸⁷ ⑥⁷⁸⁸ ⑥⁷⁸⁹ ⑥⁷⁹⁰ ⑥⁷⁹¹ ⑥⁷⁹² ⑥⁷⁹³ ⑥⁷⁹⁴ ⑥⁷⁹⁵ ⑥⁷⁹⁶ ⑥⁷⁹⁷ ⑥⁷⁹⁸ ⑥⁷⁹⁹ ⑥⁸⁰⁰ ⑥⁸⁰¹ ⑥⁸⁰² ⑥⁸⁰³ ⑥⁸⁰⁴ ⑥⁸⁰⁵ ⑥⁸⁰⁶ ⑥⁸⁰⁷ ⑥⁸⁰⁸ ⑥⁸⁰⁹ ⑥⁸¹⁰ ⑥⁸¹¹ ⑥⁸¹² ⑥⁸¹³ ⑥⁸¹⁴ ⑥⁸¹⁵ ⑥⁸¹⁶ ⑥⁸¹⁷ ⑥⁸¹⁸ ⑥⁸¹⁹ ⑥⁸²⁰ ⑥⁸²¹ ⑥⁸²² ⑥⁸²³ ⑥⁸²⁴ ⑥⁸²⁵ ⑥⁸²⁶ ⑥⁸²⁷ ⑥⁸²⁸ ⑥⁸²⁹ ⑥⁸³⁰ ⑥⁸³¹ ⑥⁸³² ⑥⁸³³ ⑥⁸³⁴ ⑥⁸³⁵ ⑥⁸³⁶ ⑥⁸³⁷ ⑥⁸³⁸ ⑥⁸³⁹ ⑥⁸⁴⁰ ⑥⁸⁴¹ ⑥⁸⁴² ⑥⁸⁴³ ⑥⁸⁴⁴ ⑥⁸⁴⁵ ⑥⁸⁴⁶ ⑥⁸⁴⁷ ⑥⁸⁴⁸ ⑥⁸⁴⁹ ⑥⁸⁵⁰ ⑥⁸⁵¹ ⑥⁸⁵² ⑥⁸⁵³ ⑥⁸⁵⁴ ⑥⁸⁵⁵ ⑥⁸⁵⁶ ⑥⁸⁵⁷ ⑥⁸⁵⁸ ⑥⁸⁵⁹ ⑥⁸⁶⁰ ⑥⁸⁶¹ ⑥⁸⁶² ⑥⁸⁶³ ⑥⁸⁶⁴ ⑥⁸⁶⁵ ⑥⁸⁶⁶ ⑥⁸⁶⁷ ⑥⁸⁶⁸ ⑥⁸⁶⁹ ⑥⁸⁷⁰ ⑥⁸⁷¹ ⑥⁸⁷² ⑥⁸⁷³ ⑥⁸⁷⁴ ⑥⁸⁷⁵ ⑥⁸⁷⁶ ⑥⁸⁷⁷ ⑥⁸⁷⁸ ⑥⁸⁷⁹ ⑥⁸⁸⁰ ⑥⁸⁸¹ ⑥⁸⁸² ⑥⁸⁸³ ⑥⁸⁸⁴ ⑥⁸⁸⁵ ⑥⁸⁸⁶ ⑥⁸⁸⁷ ⑥⁸⁸⁸ ⑥⁸⁸⁹ ⑥⁸⁹⁰ ⑥⁸⁹¹ ⑥⁸⁹² ⑥⁸⁹³ ⑥⁸⁹⁴ ⑥⁸⁹⁵ ⑥⁸⁹⁶ ⑥⁸⁹⁷ ⑥⁸⁹⁸ ⑥⁸⁹⁹ ⑥⁹⁰⁰ ⑥⁹⁰¹ ⑥⁹⁰² ⑥⁹⁰³ ⑥⁹⁰⁴ ⑥⁹⁰⁵ ⑥⁹⁰⁶ ⑥⁹⁰⁷ ⑥⁹⁰⁸ ⑥⁹⁰⁹ ⑥⁹¹⁰ ⑥⁹¹¹ ⑥⁹¹² ⑥⁹¹³ ⑥⁹¹⁴ ⑥⁹¹⁵ ⑥⁹¹⁶ ⑥⁹¹⁷ ⑥⁹¹⁸ ⑥⁹¹⁹ ⑥⁹²⁰ ⑥⁹²¹ ⑥⁹²² ⑥⁹²³ ⑥⁹²⁴ ⑥⁹²⁵ ⑥⁹²⁶ ⑥⁹²⁷ ⑥⁹²⁸ ⑥⁹²⁹ ⑥⁹³⁰ ⑥⁹³¹ ⑥⁹³² ⑥⁹³³ ⑥⁹³⁴ ⑥⁹³⁵ ⑥⁹³⁶ ⑥⁹³⁷ ⑥⁹³⁸ ⑥⁹³⁹ ⑥⁹⁴⁰ ⑥⁹⁴¹ ⑥⁹⁴² ⑥⁹⁴³ ⑥⁹⁴⁴ ⑥⁹⁴⁵ ⑥⁹⁴⁶ ⑥⁹⁴⁷ ⑥⁹⁴⁸ ⑥⁹⁴⁹ ⑥⁹⁵⁰ ⑥⁹⁵¹ ⑥⁹⁵² ⑥⁹⁵³ ⑥⁹⁵⁴ ⑥⁹⁵⁵ ⑥⁹⁵⁶ ⑥⁹⁵⁷ ⑥⁹⁵⁸ ⑥⁹⁵⁹ ⑥⁹⁶⁰ ⑥⁹⁶¹ ⑥⁹⁶² ⑥⁹⁶³ ⑥⁹⁶⁴ ⑥⁹⁶⁵ ⑥⁹⁶⁶ ⑥⁹⁶⁷ ⑥⁹⁶⁸ ⑥⁹⁶⁹ ⑥⁹⁷⁰ ⑥⁹⁷¹ ⑥⁹⁷² ⑥⁹⁷³ ⑥⁹⁷⁴ ⑥⁹⁷⁵ ⑥⁹⁷⁶ ⑥⁹⁷⁷ ⑥⁹⁷⁸ ⑥⁹⁷⁹ ⑥⁹⁸⁰ ⑥⁹⁸¹ ⑥⁹⁸² ⑥⁹⁸³ ⑥⁹⁸⁴ ⑥⁹⁸⁵ ⑥⁹⁸⁶ ⑥⁹⁸⁷ ⑥⁹⁸⁸ ⑥⁹⁸⁹ ⑥⁹⁹⁰ ⑥⁹⁹

別儀ナルヘシ

次ニ大師所作更ニルコト備フ香ニ花ニ仏ニ供ニ如ニ本ニ尊ニ

先ニ三ニ礼ニ了テ着ニ半ニ疊ニ金ニ二ニ丁ニ

次ニ理ニ趣ニ經ニ一ニ卷ニ勸ニ請ニ尊ニ師ニ聖ニ靈ニ成ニ正ニ覺ニ
勸請ハ尊師聖靈成正覺ノ前ノ「理趣經」ノ下ニ、細字ニ行割書ニナッ
テイル。

次ニ礼ニ懺ニ文ニ金ニ界ニ一ニ卷ニ勸ニ請ニ尊ニ勝ニ陀ニ羅ニ尼ニ三ニ反ニ
〔禮懺文〕ハ「懺文」ノ別名ナリ。

次ニ宝ニ号ニ梅ニ無ニ通ニ哭ニ金ニ号ニ百ニ反ニ丁ニ

次ニ祈ニ念ニ金ニ一ニ退ニ下ニ三ニ礼ニ也ニ
〔祈念〕ハ「退下三礼」ノ意ナリ。

次ニ尊ニ師ニ所ニ作ニ作ニ法ニ雖ニ不ニ敬ニ之ニ必ニ如ニ大ニ師ニ行ニ之ニ是ニ當ニ寺ニ
〔次尊師所作〕ハ「作法雖不敬之必如大師行之是當寺」ノ意ナリ。

次ニ三ニ礼ニ畢ニ着ニ半ニ疊ニ金ニ三ニ丁ニ

次ニ理ニ趣ニ經ニ一ニ卷ニ

勸ニ請ニ尊ニ師ニ聖ニ靈ニ成ニ正ニ覺ニ

次ニ礼ニ懺ニ文ニ如ニ金ニ界ニ前ニ

次ニ尊ニ勝ニ陀ニ羅ニ尼ニ

次ニ宝ニ号ニ處ニ彌ニ勒ニ真ニ言ニ百ニ反ニ

84 「半疊」①「半帖」。

85 「二卷」②無シ。

86 「礼懺文」③「懺文」。

87 「梅無通哭」④「梅無通哭」。

88 「備ルコト香花仏供」ト細字ニアルガ、

⑤ニハ、同ジ細字ニテ「備」香花仏

供「事」トナツテイル。

89 「次三礼」⑥「先三礼」。

90 「半疊」⑦「半帖」。

91 「勸請ハ尊師聖靈成正覺」⑧前ノ「理趣

經一卷」ノ下ニ、細字ニ行割書ニナッ

テイル。

台一胎

坏一杯

誦畢⁹² 祈念⁹³ 金^一

退下三礼也

次後夜時香花灯明^{常自是二灯} 飲食粥⁹⁴ 無之^レ

本尊所作如前^{大菩薩尊師所作無之}

次日中時^{自是洗米二坏也}

本尊并⁹⁵ 大師 尊師所作宛如開白^二

次初後時^{後イ⁹⁶ノ⁹⁷ノ⁹⁸無之} 本尊所作如前 大師 尊師所作無之^レ

一次第書写并^二暗誦等時分事⁹⁹

皆是加行百日中之所作也^{ナリ} 暗誦之時分行者利鈍隨^{ニテ}

假一仮

師主被許之仍延縮不定也^{ヲテ} 但是大概也⁹⁹ 假令十八道七十日以後之書写八十日已後暗誦等也 但是大

概也 書写之堪否暗誦之利鈍其機未^タ 一准^{ナラニハ} 實書写

坎一歟

不堪^レ 之行者以古本被授之坎常事坎利根行者五日六日暗誦校合也^{スル} 鈍根十日九日不叶加行中^ヲ 又^{スモ}

アリ

92 「畢」①「了」。

93 「誦シ畢テ祈念セヨ」④ 「誦シ畢テ礼祈念セヨ」。

94 「飲」①「飯」。

95 「日中時」②「日中」。

96 「初後時」①「初夜時」。

97 「時分事」①「時分等」。

98 「百日ノ中ノ所作也」①「百日之中之所作也」。「百日之中也」。

99 「但是大概也」①無シ。

100 「七十日」①「七日」。

101 「一准」②「准」。

102 「古本」①「古」。

103 「坎」①②無シ。
104 「常ノ事坎」①「常事坎」。

105 「暗誦校合スル也」①「暗誦校合也」。
106 「鈍根」①「鈍根機」 虫損アリ。

頭願

其時加行百日結頭シテ一時暗誦ニテ等了後初行ヲモ可始レ之⑩
問 暗誦中用心如何⑪

答 三時自行 入堂并ニ食時 大小便利之外晝夜無⑫

他事可勵之 坊中朝夕勤行尚被免之 又不剃髮⑬

不切爪 沐浴等猶不自由 況於會遊之席 蜂起鬪諍⑭

之庭令出頭乎 努力可停 止之又断酒⑮ 断婦⑯

勿論 凡兒童之戲咲⑰一所之夜⑱宿惣⑲加行中堅⑳

可禁之 委細祖師御㉑○草之雜時所之作法有之可㉒

悉之

臥臥

問 行者寢卧之時袈裟撤之事如何㉓

答 凡大小使用之外眠卧之時㉔テハ不可放袈裟㉕

衣乍着眠卧也 陰所之時ナラテハ不脱之 但上堂㉖

之衣内々着用各別㉗尤可用意㉘之㉙

⑩「一時」○無シ。

⑪「可始」之○「可始」。

⑫「暗誦中」○「誦中」。

⑬「大小便利」○「大小便利」、○「天小便痢」。

⑭「坊中朝夕勤行」○「坊中朝勤行」。

⑮「猶」○無シ。

⑯「努力」○「努力」。

⑰「戲咲」○「戲笑」。

⑱「可禁」之○「可禁」之云。

⑲「御○草」之○「御記草」之記。

⑳「袈裟撤」之○「袈裟衣撤」之。

㉑「大小使用」○「大小用」。

㉒「外」○無シ。

㉓「不レ可放」袈裟云。

㉔「不レ可放」袈裟云。

㉕「不レ可放」袈裟云。

一 初行問事

先加行百一日日中結願自其夜初行開白有¹²¹表白¹²²

三時勤行作法如常、但改¹²³禮拜而行法之次第能¹²⁴

可納¹²⁵得之併守師主訓說不可異求者也

問道場料理等如何

答 本尊 大師 尊師 其上壇上供物以下如十八

道、但鈴杵金剛盤并灑水塗香器置之¹²⁶以之為異

第八日¹²⁷日中結願了結願作法可習之又自其夜正

行開白有¹²⁸表白一百日三時可勤行之

問 加行初行正行三時供物各々有異如何

答 全同也 開白 結願¹²⁹ 每日日中¹³⁰ 洗米

初後夜二時 香 花 燈明許也 大師 尊師所

作又以無異耳

問 此加行已下必可相¹³¹續事欤如何

答 加行并¹³²初行必可相¹³³續 次百日正行或暫¹³⁴閣

121 「百一日」①「百日」。

122 「有表白」ト細字デアリ、㊦「在表白」ト細字ニアリ。

123 「次第」①「次」。

124 「以下」㊦「已下」。

125 「以之」①無シ。

126 「了」①無シ。

127 「結願作法可習之」㊦「結願作法」。

128 「有表白」小字デアリ、㊦ニハ「在

表白」トアル。

129 「初行」一流伝授時配布聖教ニ無シ。

130 「二時」①「三時」。

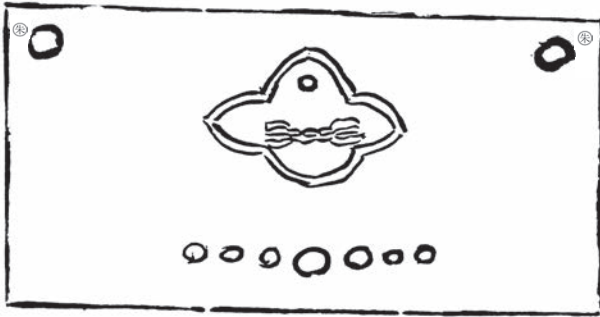
131 「許リナリ也」①「計」。

132 「此加行」①「此加行也」。

時一 一 一

如意輪像
大師
尊師

⑬



⑬此ノ図、底本ニ対シ⑭⑮デハ大師ト尊師ガ入レ替ツテイル。

一次第書写并暗誦事

金剛次第七十余丁^⑭坎書写之日^⑮数行者右筆^⑯堪否不定也。六七十日被^⑰許之哉^⑱暗誦日数^⑲廿日計^⑳坎^㉑尤^㉒トモ

為大事仍多分行者退屈者也。實書写不叶者古本^㉓ヲ以

傳受如十八道若加行中暗誦等不叶者結頭以後以^㉔ニ

一時可終其功者也

問 初行壇品

答 本尊可奉懸替大師尊師已下如例

問 金剛界曼荼羅一幅無子細若ツ、キ兩界本尊之時為之如何

答 本儀 先金界正行 胎界未及仍金界一幅可^㉕レ

然但ツ、キ兩界之外無本尊無力事坎可用之哉

問 加行正行等次第如十八道也

答 全同也

⑭「金剛次第」⑰「坎」⑱「許」

⑲「計」⑳「廿」㉑「尤」

⑳「初行壇品」㉑「初行壇品如何」

㉒「已下」㉓「以下」

㉔「金剛界」㉕「金界」

㉖「曼荼羅」㉗「方荼罗」

㉘「一幅」㉙「二幅」㉚「二幅」

㉛「若」㉜「着」

㉝「胎界」㉞「台藏」

㉟「無本尊」㊱「無本尊者」

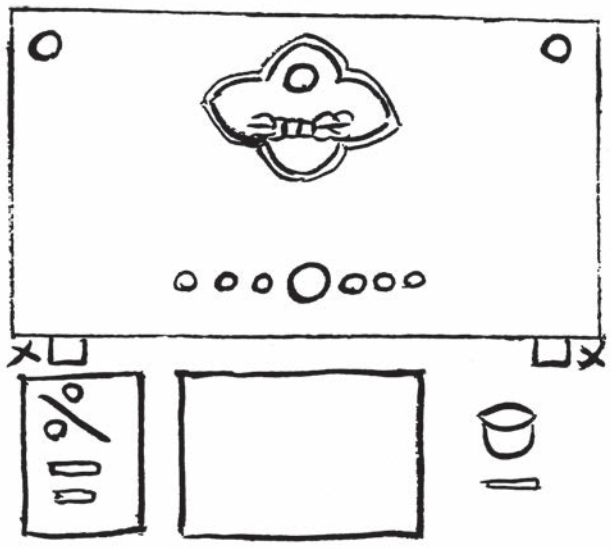
㊲「加行正行」㊳「加行初正行」

㊴「如十八道也」㊵「如十八道坎」

金剛界曼荼羅

大師

尊師



○胎藏界^⑬

加^⑭行^ハ又^⑮金剛界^⑯百^⑰日^⑱之^⑲仍^⑳本^㉑尊^㉒ 大師 尊師 所作

已^㉓下^㉔悉^㉕如^㉖金界^㉗正^㉘行^㉙無^㉚異^㉛者^㉜也 加^㉝行^㉞六^㉟七^㊱十^㊲日^㊳之^㊴比^㊵次

第^㊶書^㊷写^㊸暗^㊹誦^㊺等^㊻又^㊼以^㊽如^㊾金^㊿界^{一〇} 行^{一一}者^{一二}機^{一三}根^{一四}依^{一五}金^{一六}界^{一七}ヨ^{一八}リ^{一九}胎

藏^{二〇}ヲ^{二一}バ^{二二}タ^{二三}ヤ^{二四}ス^{二五}ク^{二六}暗^{二七}誦^{二八}ナ^{二九}ント^{三〇}ス^{三一}ル^{三二}人^{三三}ア^{三四}リ^{三五}然^{三六}而^{三七}大^{三八}方^{三九}台

藏^{四〇}每^{四一}事^{四二}煩^{四三}敷^{四四}事^{四五}令^{四六}存^{四七}知^{四八}者^{四九}也

問 台^{五〇}藏^{五一}初^{五二}行^{五三}壇^{五四}岳^{五五}如^{五六}何

答 金^{五七}界^{五八}曼^{五九}荼^{六〇}羅^{六一}徹^{六二}之^{六三}台^{六四}藏^{六五}曼^{六六}荼^{六七}羅^{六八}可^{六九}懸^{七〇}替^{七一} 其^{七二}外^{七三}又^{七四}金

界^{七五}加^{七六}行^{七七}壇^{七八}不^{七九}可^{八〇}異^{八一}者^{八二}也

本^{八三}尊^{八四}ツ^{八五}キ^{八六}兩^{八七}界^{八八}ナ^{八九}ラ^{九〇}ハ^{九一}無^{九二}煩^{九三} 加^{九四}行^{九五} 初^{九六}行^{九七}不^{九八}可^{九九}有^{一〇〇}相

違^{一〇一}者^{一〇二}也 大^{一〇三}師^{一〇四} 尊^{一〇五}師^{一〇六}大^{一〇七}方^{一〇八}四^{一〇九}度^{一一〇}共^{一一一}奉^{一一二}懸^{一一三}之^{一一四}者^{一一五}也

○護摩^⑬

護^⑭摩^⑮別^⑯無^⑰加^⑱行^⑲胎^⑳藏^㉑正^㉒行^㉓百^㉔日^㉕末^㉖護^㉗摩^㉘次^㉙第^㉚傳^㉛受^㉜也

⑬「金剛界」⑭「金界」

⑮「胎藏」⑯「台藏」

⑰「台藏」⑱「台藏」

⑲「每事」⑳「每度」

㉑「令存知」⑳「人々令存知」

⑳「台藏」㉑「台藏」

㉒「曼荼羅」㉓「万荼罗」

㉔「台藏」㉕「台藏」

㉖「曼荼羅」㉗「万荼罗」

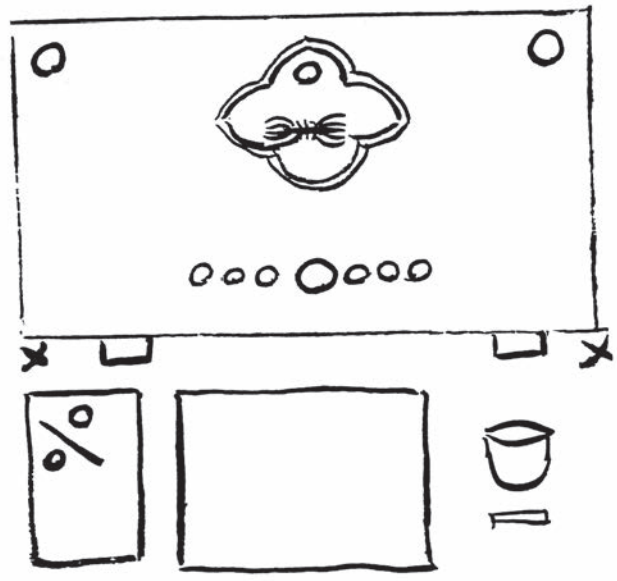
⑳「兩界ナラハ」㉑「兩界ナラハ」

㉒「別無加行」㉓「無別加行」㉔「無加行」

㉕「護摩」㉖「言尸」

167

胎藏曼荼羅
尊師
大師



①此ノ図、底本ニ対シ②③デハ大師ト尊師ガ入レ替ッテイル。

爐—爐—炉

但校合ナンドハ無之 本尊不動尊也 胎藏正行

百一日日中結願自其夜護摩始行有表白

第八日日中結願又自其夜更百日行之或七日護摩

已後暫閣之事如先々

問 壇畚如何又支具等如何

答 支具支分大事繁悉難註之所詮息災、円爐也 尤

能々可有其沙汰事トモ

①「但シ」①無シ。

②「胎藏」①「台藏」。

③「百一日」①「百日」。

④「護摩」①「言尸」。

⑤「替」①②「有表白」細字テ右寄セニナツ

テイル。③「表白」細字テ右寄セニナツ

テイル。

⑥「又」②無シ。

⑦「支」①無シ。

⑧「註」①「注」。

⑨「事」①②「耳」。

次頁ノ護摩壇図ノ註ノ分。

⑩此ノ図①ニハ、不動尊、大師、尊師ガ

記サレテイナイ。②ニハ大師ト尊師ガ

入レ替ッテイル。

⑪此処ニ「佛供居様開白結願如此」ト

アル。

⑫此処ニ「概四本五色糸鳥居一本如常」

トアル。

⑬護摩壇上、脇机上ノ仏具ニツイテ、⑭

ニハ中瓶ニ続ケテ香葉トアリ、菓ニ続

イテ木トアル。又⑮ニハ大杓ト小杓ノ

二ツダケデアル。脇机上ニ扇ガ無く、

説明記入モ無イ。

畧一略

問 三時供物如何⁽¹⁸⁴⁾

答 初⁽¹⁸⁵⁾夜⁽¹⁸⁶⁾香⁽¹⁸⁷⁾ 花⁽¹⁸⁸⁾ 燈明⁽¹⁸⁹⁾之外無供物⁽¹⁹⁰⁾
但開白二⁽¹⁸⁴⁾ 如土⁽¹⁸⁵⁾ 攝⁽¹⁸⁶⁾

後⁽¹⁹¹⁾夜⁽¹⁹²⁾粥⁽¹⁹³⁾二⁽¹⁹⁴⁾坏⁽¹⁹⁵⁾ 畧式⁽¹⁹⁶⁾燒⁽¹⁹⁷⁾供⁽¹⁹⁸⁾飯⁽¹⁹⁹⁾入⁽²⁰⁰⁾レ⁽²⁰¹⁾水⁽²⁰²⁾
日⁽²⁰³⁾中⁽²⁰⁴⁾中⁽²⁰⁵⁾間⁽²⁰⁶⁾日⁽²⁰⁷⁾中⁽²⁰⁸⁾洗⁽²⁰⁹⁾米⁽²¹⁰⁾二⁽²¹¹⁾

坏⁽²¹²⁾ 開⁽²¹³⁾白⁽²¹⁴⁾結⁽²¹⁵⁾頭⁽²¹⁶⁾契⁽²¹⁷⁾佛⁽²¹⁸⁾供⁽²¹⁹⁾等⁽²²⁰⁾如⁽²²¹⁾前⁽²²²⁾

問 汁⁽²²³⁾者⁽²²⁴⁾何⁽²²⁵⁾物⁽²²⁶⁾乎⁽²²⁷⁾

答 小⁽²²⁸⁾豆⁽²²⁹⁾能⁽²³⁰⁾煎⁽²³¹⁾也⁽²³²⁾ 但⁽²³³⁾不⁽²³⁴⁾入⁽²³⁵⁾塩⁽²³⁶⁾也⁽²³⁷⁾

問 菓子⁽²³⁸⁾何⁽²³⁹⁾物⁽²⁴⁰⁾乎⁽²⁴¹⁾

答 田⁽²⁴²⁾菓子⁽²⁴³⁾餅⁽²⁴⁴⁾也⁽²⁴⁵⁾ 今⁽²⁴⁶⁾別⁽²⁴⁷⁾行⁽²⁴⁸⁾護⁽²⁴⁹⁾摩⁽²⁵⁰⁾等⁽²⁵¹⁾ 畧⁽²⁵²⁾式⁽²⁵³⁾木⁽²⁵⁴⁾菓子⁽²⁵⁵⁾計⁽²⁵⁶⁾也⁽²⁵⁷⁾

栗⁽²⁵⁸⁾ 柿⁽²⁵⁹⁾ 栢⁽²⁶⁰⁾ 實⁽²⁶¹⁾ 風⁽²⁶²⁾ 情⁽²⁶³⁾ 隨⁽²⁶⁴⁾ 時⁽²⁶⁵⁾ 一⁽²⁶⁶⁾ 種⁽²⁶⁷⁾ 用⁽²⁶⁸⁾ 之⁽²⁶⁹⁾

問 粥⁽²⁷⁰⁾用⁽²⁷¹⁾汁⁽²⁷²⁾事⁽²⁷³⁾有⁽²⁷⁴⁾之⁽²⁷⁵⁾乎⁽²⁷⁶⁾

答 御⁽²⁷⁷⁾修⁽²⁷⁸⁾法⁽²⁷⁹⁾時⁽²⁸⁰⁾粥⁽²⁸¹⁾八⁽²⁸²⁾坏⁽²⁸³⁾也⁽²⁸⁴⁾ 用⁽²⁸⁵⁾汁⁽²⁸⁶⁾事⁽²⁸⁷⁾ 且⁽²⁸⁸⁾無⁽²⁸⁹⁾之⁽²⁹⁰⁾其⁽²⁹¹⁾外⁽²⁹²⁾自⁽²⁹³⁾行⁽²⁹⁴⁾

等⁽²⁹⁵⁾又⁽²⁹⁶⁾以⁽²⁹⁷⁾同⁽²⁹⁸⁾之⁽²⁹⁹⁾

問 壇⁽³⁰⁰⁾木⁽³⁰¹⁾ 乳⁽³⁰²⁾木⁽³⁰³⁾寸⁽³⁰⁴⁾法⁽³⁰⁵⁾如⁽³⁰⁶⁾何⁽³⁰⁷⁾

答 壇⁽³⁰⁸⁾木⁽³⁰⁹⁾八⁽³¹⁰⁾寸⁽³¹¹⁾ 四⁽³¹²⁾種⁽³¹³⁾法⁽³¹⁴⁾同⁽³¹⁵⁾之⁽³¹⁶⁾ 乳⁽³¹⁷⁾木⁽³¹⁸⁾隨⁽³¹⁹⁾法⁽³²⁰⁾ 而⁽³²¹⁾有⁽³²²⁾異⁽³²³⁾
謂⁽³²⁴⁾息⁽³²⁵⁾災⁽³²⁶⁾六⁽³²⁷⁾寸⁽³²⁸⁾而⁽³²⁹⁾已⁽³³⁰⁾

(184) 「之」無シ。

(185) 「畧式」無シ。

(186) 「日中」無シ。

(187) 「開白結頭」無シ。

(188) 「如前」無シ。

(189) 「畧式」略或只。

(190) 「隨時」隨得。

(191) 「用之」用也。

(192) 「乎」耶。

(193) 「御修法時」御修法之也。

(194) 「且」無シ。

(195) 「同之」同也。

問 乳木金剛盤置時或本本尊向或行者向之以何

可為本乎

答 兩說共用之八千枚 必本 向本尊也 常護摩

兩說共被用之其中 ○本向行者方多分之樣

也 師祖共被用之者也 凡其煩惱斷枝末根本之兩

說有之仍兩樣共有由事也 脇机置之時多分本向

行者方也

問 鳥居頭或宝形或ヤハズ等其樣之有之坎當流

何樣乎

答 宝形 アラス ヤハズ アラス 只直打切樣

也 末少太 本聊細

問 五色糸卷付之時鳥居頭上可引坎如何

答 不焚鳥居頭 五六分計下邊左右引渡也

凡引五色等自丑刁概次第順引廻之 壇何方向五

色糸隨方

195 「時」之無シ。

197 「向本尊」①「本尊向」。

198 「常」之「當」。

199 「〇」底本ニ朱書サレテオリ、①②③

ノ三本スベテ「猶」トアル。

200 「方」①「方向」。

201 「其」之無シ。

202 「之」①無シ。

203 「向」行者方①「行者方向」。

204 「ヤハズ」①「矢筈」。

205 「アラス」①「非」。

206 「ヤハズ」①「矢筈」。

207 「アラス」①「非」。

208 「之」①「也」。

209 「不焚」①「不尔」。

210 「五六分」①「上六分」。

211 「計り」②「程」、③「許り」。

212 「引」五色「等」①②③「引五色樣等」。

213 「丑刁」②「丑寅」。

214 「次第」①「次才」。

問 神供何度修之乎スルカ

答 七日護摩者初中後三度也 御修法已下皆如此ニハ

百日護摩同日之 十ケ日一度供之 謂開白若二日ナラハ

十二日九二日供之其月若大 次月又如此其月若

小 次月 三日十三日廿三日ナル也ナラハノ ヨリハ

問 神供用墓坎如何ニハ

答 別行之時大畧用墓也 御修法本儀只庭砂上弊ニハ

立可修之云 然當時粗墓用坎ニハ

問 兩儀神供如何ニハ

答 或堂上ニテ 緣ニテ 端ニテ 修之或延引是口傳也ニハ

他門神供伴僧坐修之也ニハ

問 作壇 破壇如何

答 惣シテ 而作壇作法者爐壇之建立有其沙汰坎ニハ

仍作壇不用人有之由 報恩院令記之給今小作法大ニハ

畧報恩院已來被記加之次ニハ

215 「護摩」㊦「言尸」。

216 「已下」㊦「已」。

217 「護摩」㊦「言尸」。

218 「四日」㊦「開日者」。

219 「此」㊦「是」。

220 「弊」㊦㊦「弊」。

221 「然」㊦「然而」。

222 「用坎」㊦「用也」。

223 「兩儀」㊦「雨儀」、㊦「雨」無シ。

底本写誤力。

224 「坐」㊦「座」。

225 「爐壇」㊦「爐」。

226 「報恩院」㊦「幸心院」。

227 「小作法」㊦「小法」。

228 「報恩院」㊦「幸心院」。

229 「次」㊦㊦「坎」。

勒勤

破壇^ハ之作法^ハ古^ト来^モ尤^ク有^ル其沙汰^ハ尤^ク可用^ル乎^カ

作壇^ハ者着座^ニ最初^ニ三ヶノ印明^レ用^レ之或御修法^ハ時ナ^ド

ハ壇行事^ハ之仁勒^ル之常事^也

今別行者^ハ○ノミ可習^ル行者^也

破壇者^ハ御修法^ハ阿闍梨^ハ大畧^ニ行^フ之常事^也 自他門同^シ

之^ハ是別シタル事^也

先行法^ハ之期日^ニ結頭^ニ可破壇^ル之者^也

已上四度加行大概土代報恩院前大僧正

御房御草也 ○根来寺中性院 聖融

僧都彼御記所望申畢其子細近^ニ比

田舎邊四度加行等作法粗^ニ違本寺之儀

處有之坎仍為令散不審如此^ニ令申坎此

間於^ニ彼寺邊行來作法一帖聖融僧都書

進之^ニ取合有御一見之処誠當流作法相

違多端有之仍御記分一卷有御清書

被遣之其次 御本申請書^ニ写之^レ

230 「最」①「寂」。

231 「用」①無シ。

232 「壇行事之仁」①「壇行事」。

233 「今別行者」○「ノミ」①②③④「今別行者」。

234 「坎」①「也」。

235 「破壇」②「破上」。

236 「御修法」①「御修」。

237 「是別シタル事坎」ノ前ニ①ニハ「但内々別行壇若炬暫ク用之暫不破壇之支」ノ一七字ヲ加エテイル。

238 「行法」①「何法」。

239 「大概」①無シ。

240 「報恩院」②「幸心院」。

241 「○」①②③「今度」。

242 「處」②「聆」。

243 「此」①「是」。

244 「令」①「合」。

245 「之」①「了」、②無シ。

246 「取合」①「校合」。

247 「當流作法」①「當流之作法」。

248 「相違多端」②「相違分多」。

249 「御記分」①「御記之分」。

250 「御本申請」②「御本於申請」。

251 「書」写之了①「令書写了」。

西ニ醜醜

應永^{②①}廿八年十二月中旬之比於上西ニ行樹院書之

金剛仏子 隆瑜

本云

②①コノ奥書②ニ無シ。

元禄十年^{②③}丁七月十三日於大和長谷寺書之右之本北之坊勝如之御本以写今又此^{②④}写了

意柵房 弄賢

②③コレハ②ニアル奥書。コノ後底本並ニ
②④ニ見ラレル記載ハ、②ニハ無シ。

色

五色 青 黄 赤 白 黒

五宝 金 銀 瑠璃 水精 真珠

五穀 稻穀 大麦 小麦 大豆 胡麻

寛政元己酉秋七念一書写之早

傳

宥傳

②⑤享和三癸亥閏正望夜以或人本一校訖以朱者是也

結 び

本書の撰述者については、末尾に本書撰述の由来が小字で記されている部分があつて、そこに「報恩院前大僧正御房、御草也」とあるが、実際にその名前は記されていない。

「本云」とする本奥書には、応永二十八年（一四二一）に上醍醐の行樹院で隆瑜師（智山の隆瑜師とは別人）が、本書を書写したことが記されており、この応永二十八年は隆源大僧正（一三四一〜一四二五）の在世時であり、「前大僧正御房」と記すところから時期的に見て、由来書の部分も隆瑜師の筆になるものかと考えられる。

ただ対校に甲本として用いた、元禄十年（一六九七）の豊山長谷寺北坊勝如師所藏本からの弄賢師書写本には、由来書が本文と同じ大きさの文字で書写されているが、この隆瑜師の本奥書は無い。

底本として用いた宥豊師（一七六〇〜一八二三）の写本の表紙見返しに、「宗云」として「四度土代、憲深第七代幸心完隆源、作也」と記した押紙が付されている。この中の「幸心完」は、報恩院の片字である。

宥豊師については、智山全書解題に付されている智山学匠略伝に記されており、それによれば安房国和宗村の出身で、海応能化（智積院第三十二世）と並び称せられる学匠であつたことが知られる。

その宥豊師が本書のこの押紙に「宗云」と記している「宗」師については、宥豊師と親しい関係にあり、同じ時代に智積院に住していた僧侶と考えられる。

それについて智山第二十八世に任ぜられた謙順大和尚（一七四〇〜一八一二）が、寛政八年（一七九六）に野沢諸法流を伝授したことがあり、その時の伝授を興雅師という受者が、『諸法流伝授記』としてまとめておられる。

その『諸法流伝授記』を宥豊師が文化六年（一八〇九）に、同じ謙順大和尚から諸法流を受法することになり、そ

れに先立って写し取らせてもらっている。^②

この興雅師についても智山学匠略伝に記されており、字は宗竜で宥豊師も『諸法流伝授記』転写本の奥書の最初に、「宗興雅師先年従於謙順大和尚傳授野澤諸法流之記也」と記している僧侶で、この宗師は紀州の出身で巽寮に住し、後に養真院に住し声明に通じていたと考えられている僧侶であり、生没年は不明とされているが、この僧侶が言っていたことを「宗云」としたのだと思われる。

これ等からも、また東密事相口訣集成1（青山社刊）の中の稲谷祐宣師訓下本にも、内題に「当流四度加行条々私隆源これを撰す」とあつて、^④題名の下に撰述者が隆源大僧正であることを記しており、こうしたことから本書は隆源大僧正の撰述と見て問題無いものと考えられる。

この時代に大僧正になった僧侶は少ないので、報恩院前大僧正御房とあれば、隆源大僧正であることがわかってい
たと思われるのである。

以上から本書は、隆源大僧正の撰述で、早い段階から隆源僧正自筆の原本と、根来寺中性院第六世の聖融僧都（二四二頃）に清書して与えられた一本と、隆瑜師が書写した一本とが存在していたことが知られる。

此の度校合に用いた甲本は、隆瑜師の奥書が無く、聖融師に与えられた本からの転写本と考えられ、他の乙本と丙本、さらに三宝院流憲深方一流伝授時配布複製本と東密事相口訣集成1所収本の四本は、隆瑜師書写本からの転写本であつて、この隆瑜師書写本からの転写本が流布していたようである。

次に本書の題名である『四度土代』の「土代」が、いかなる意味で用いられているかについてであるが、この語は既に以前から用いられており、本書の著者隆源大僧正（一三四二〜一四二六）より八代前に、醍醐寺第二十五代座主

であった成賢僧正（一一六二～一二三二）がおられるが、この成賢僧正輯とされる五十四帖の『作法集』があり、その第三十六帖に「修学土代」という一帖がある。

この『修学土代』には、「真言師可有沙汰事」として、事相、教相、目錄、血脈、支度卷数、日記先例、図像、香葉、梵字悉曇、声明法則、持戒行業の十一項目について、学ぶべきこと、用心すべきことが記されており、末尾に「已上條々為初心人隨思出記之 東寺沙門成賢」と記されていることから、上田靈城阿闍梨は『三寶院洞泉相承伝授録』^⑤下巻三四七頁に、「即ち真言師の修学の土台、基本を述べた成賢の記である。」として、この「土代」は基本の意味とされている。

こうしたことから本書は、隆源僧正が真言宗僧侶の瑜伽觀行修行の最初である四度を実修する際の基本となるところを、この成賢僧正の『修学土代』にならって、『四度土代』として撰述されたものということになる。

註

- ① 智山全書解題 昭和四十六年七月三十一日 智山全書刊行会発行 四九一頁下段～四九二頁上段。
- ② 『諸法流伝授記』成田山仏教図書館所蔵

ち
115
86
- ③ 智山全書解題 前註①五〇一頁上段。
- ④ 東密事相口訣集成 1 稲谷祐宣編 『四度泊如記・四度土代』平成四年一月十五日 青山社 発行九九頁一行目。
- ⑤ 『三寶院洞泉相承伝授録』下巻 平成十二年十月二十日 法流研究会事務局発行